武蔵の里界隈マップ

因幡街道と古町町並み保存地区

播磨国と因幡国を結ぶ道は古くから人馬の往来があり、宮本・今岡・中町・古町はその道筋にあたる交通の要路でした。この道が因幡街道で、江戸時代は鳥取藩主の江戸参勤の道となり、道路・宿駅が整備されました。

古町は小原宿（おはらじゅく）と呼ばれ、本陣・脇本陣・問屋が置かれました。明治維新以後も「運輸交通頻繁にして旅客の本村（大原村）に宿泊するもの日々平均八九十人下らざりし」と『英田郡誌』が明治中期の状況を記してあります。

因幡街道の宿場町として発展してきた古町は、本陣・脇本陣の遺構が町の中心部にそろって現存し、江戸時代後期から明治・大正期の町屋（まちや）を中心に町並みを構成して、今なお宿場の景観を保っており、昭和六十一年に岡山県から『町並み保存地区』に指定されました。

①大原本陣

本陣には、因幡街道を往来する他の賓客も泊まりましたが、第一の利用者は、因伯二州で三十二万石の鳥取藩主の池田侯でした。天明三年（一七八三）類焼の記録がありますので、現在の本陣の建物は、寛政年間（一七八九～一八〇一）のものといいます。池田侯の参勤交代の途中の宿泊に供するために建てられたものですが、本陣は一般に宿場の素封家（そほうか：金持、財産家）が指定されました。営業ではなかったのですが、それなりの部屋は常に用意しておかねばならなかったようです。大名一行ともなれば人数も相当なものですから、用意の座敷も多く、またそれなりの格式ある造りでなければなりませんでした。県史編纂室の調査によると、有元家は宝暦十一年（一七六一）に本陣を命ぜられて明治に至るとあります。

それ以前は、元禄十二年（一六九九）没の中村亦右衛門孝政が本陣を仰せ付けられていたといいます。

数寄屋造の御殿と御成門が今なおその姿をとどめています。

②脇本陣

この宿場の脇本陣は、屋号を米屋といいました。脇本陣は、大名や幕府の重臣が本陣に泊まる時、家老や奉行の宿舎にあてられました。平常は第一級の旅籠（はたご）として営業を行ったようです。

建築は、文政二年（一八一九）類焼後のもので、主家（桁行七間半、梁間五間半の町家造り）・玄関・長屋門（桁行九間半、梁間一間半）・池庭・土蔵を備えています。長屋門は、江戸時代普通の家になかったもので、虫籠（むしこ）窓があり、従者の詰めの間や寝間に使われました。北の端の便所には刀懸けがあります。

③山王山城跡

山王山城があった朝霧山は大原神社（山王宮）の裏山で、古町の東側にあって尾根型をしています（標高355m）。地元の人たちはもっぱら城山（しろやま）と呼んでいます。

後に新免伊賀守貞重が明応二年（一四九三）下町の竹山城に移ると、この城は廃城となりました。城跡に登ると眼下に古町の町並みが一望できます。

④平賀元義の歌碑

大原神社の石段を上がり随身門を通って左手に建てられています。歌碑の正面には「弘化四年（一八四七）八月十二日大原の郷　三星の茂信が家にて　美作や大原山の山つ芋こきたくひて吾は肥にけり　源元義」と刻んであります。

明治の中頃、正岡子規が日本新聞に、「万葉調の歌を世に残したる者、実に備前に歌人平賀元義一人のみ」と絶賛紹介しています。現在では四基（柵原、大原、奈義、津山）の歌碑が知られています。

⑤新免備中守貞弘の墓

川上山根小丸山にある。高さ五〇センチの台石の上に、高さ二〇センチ・幅四〇センチの墓碑が立っている。貞弘は二代竹山城主新免宗貞の弟で三代宗貫の時代に活躍。武功の誉れ高かった武将です。

碑の正面には、「嶺松院清覺大居士　照月院妙鏡大姉」右側面は、「慶長十一年丙己午（一六〇六）九月晦日　俗名新免備中守貞弘」左側面は、「慶長六年辛丑（一六〇一）十一月十五日同人室」裏面には、「延享元年甲子（一七四四）五月造立之」と刻んであります。なお、川上の霊山寺に貞弘の位牌が祀られています。

⑥竹山城跡

竹山城は『太平記』にもその名が出てくる中世後期の吉野郡第一の山城でした。

明応二年（一四九三）新免伊賀守貞重は、東部作州に勢を張るために古町山王山城から移り、以降三代一〇八年間、慶長五年（一六〇〇）関が原の敗戦まで在城しました。

山裾まで竹林に覆われていたので、籠城の時は竹を槍のごとく切り倒し、敵の侵入を防ぐことのできた戦国山城の立地条件を備えた天下の要塞でした。

城跡に立つと、南東は武蔵の里、北は中国山地の山並み、眼下には古町の家並みが一望できます。

⑦一乗山霊山寺

霊山寺は、川上の中央、国道四二九号線を左へ約三〇〇㍍上った小高い所にあります。宗派は古義真言宗で、本寺は高野山金剛三昧院。本尊は聖如意輪観音です。また英中霊場の第三番、美作八十八ヶ所霊場の八十八番札所で結願所でもあります。

『英田郡誌』には「創建は僧空海上人、古くは二重寺山の中腹に普門院をはじめとする十坊があった。元弘のころ（一三三一～三四）六坊は武家に属したため漸く廃坊となった。その後竹山城主新免伊賀守が寺領九町五反歩を寄付して再興した」とあります。

⑧さっこりの桜

国道三七三号線岡山県兵庫県境さっこり峠の頂上に上下古木二本の桜があります。根元に地蔵様が安置されており『西町の歩み』には「さっこり峠に享和二年（一八〇二）お地蔵様を一基建立し、記念に桜の木を植樹した」とあります。

⑨智頭急行「宮本武蔵駅」

宮本武蔵生家跡から北方へ五百㍍のところを右折して八十㍍行くとあります。

宮本武蔵誕生の地にあるのでストレートに「宮本武蔵駅」となった珍しい人名の駅です。到着して目に入ってくるのが、ホームの壁に掲げられた約2㍍ほどの大きさの宮本武蔵の肖像画で迫力があります。

駅前には、幼少の頃の武蔵・お通・又八の銅像が立っています。

⑩宮本武蔵姉お吟の墓

下庄町字蔭にあります。蔭荒神様の参道を右に二〇㍍程登ると平尾家の墓地があります。その中央を二〇段程上がると平地になり、その右端に六〇センチ・幅二・五㍍・奥行一・五㍍の石積みの台座があり、その上に二基の自然石の墓石があります。右側が宮本武蔵の姉「お吟」の墓です。高さ一㍍の石塔の正面に「鶴寿院月松妙永禅尼」、右側に「慶長十六年（一六一一）十一月廿四日」と刻まれています。無二斎の娘で武蔵の姉であるおぎんは、宮本村の平尾太郎右衛門の養子与右衛門に嫁ぎ、下庄に移って農民になりました。

⑪宮本武蔵兄次郎大夫の墓

川上南にあります。宮本武蔵の兄の墓と伝えられています。碑は、高さ一㍍の自然石です。碑の正面には「万治三年庚子（十一月十三日）須嘉宗心禅定門　文化六巳年（一八〇九）年百五十年祭」碑の左面には「平田武仁少輔嫡子俗名次郎太夫　行年八十三歳」と刻まれています。

⑫平田武仁の墓

川上岡の竹藪のなかに、高さ四五センチの相好のよい地蔵様が座っています。

これは、平田無二（宮本武蔵の父）の墓といい伝えられています。無二は、時の将軍足利義昭から、日下無双兵法術者との号を賜わった剣術者で無二斎とも称しました。「真源院一如道仁蒙居士」とあり、その妻お政の戒名が横に並べて刻まれています。

⑬正蓮庵

正覚寺の奥の院といえる由緒ある庵です。この庵に平福の名家田住家の縁続きとなる道林坊（利神城主別所静治の三男）と言う僧がいました。宮本武蔵がこの道林坊のもとで正蓮庵にぬかずいて経を読み、行者山に登って修練したともいわれています。

⑭宮本武蔵初決闘の場

宮本武蔵決闘の場に五輪書序文の一節の碑があります。宮本武蔵は13歳のとき「何人なりとも望みしだい手合わせいたすべし、われこそ日下無双兵法者なり」という、新当流の達人・有馬喜兵衛の高札を見て、金倉橋のたもとで初勝負をいどみ、一刀のもとに倒したといわれています。

⑮姫鳥線大原ICと桜

大原ICは、中国自動車道佐用JCTから、鳥取市の鳥取ICへ至る高速自動車国道（鳥取自動車道）の岡山県美作市（大原地域）にあるインターチェンジです。

武蔵の里大原観光協会は、大原IC周辺の桜植樹の提案を地元有志から受け、「大原インターさくらの会」を平成二十一年に設立。

二百本のさくらを大原小学校・中学校生徒及び地域の人たちの参加により、平成二十一年十一月に記念植樹しました。